

# 壹

2019·11

# 風萱集

亀田虎童子

薔薇の名を聞いて忘れて戻りけり  
噴水の向かふの人と辞儀交はす  
町裏や蟬の悲鳴を鴟追うて  
「としよりの日」のとしよりの一人かな  
よこしまな笑ひを誘ふわらひ茸

木村 嘉男

ひとねむり醒めるや蟲のこゑあらた  
伏すわれへ秋の初風到りける  
秋風やわれをこころにあやめぬて  
けづらせて野ずゑ過ぎゆく秋時雨  
時すぎゆくけけれこころと河鹿なき

出牛 進

登り来ていま秋風の立石寺  
文よりも梨に実のある便りかな  
投網して夕立の中を帰りけり  
仰ぎたる磴はさかりの萩の中  
庭を掃く隣の音も秋めきぬ

松下 道臣

父の日の眠つたふりをしてをりぬ  
どくだみの売れぬ売地にはびこりぬ  
知恵の輪に知恵のおよばず梅雨に入る  
青萱のつけし生傷潮にほふ  
おいそれと近付きがたし水芭蕉

小島 良子

秋風や紐の重さのハンモック  
右手もて掴む左手厄日来る  
秋風のおつまつてをり避難場所  
人の名を思ひ出す間や秋の蝶  
対岸はいつも遙かや秋の蝶

# 萱集

進選

蝸につれて雉鳩朝ぼらけ

東京 ぶなかわのりひと

昨日かと妻の問ひかけ秋来る  
出書院の遺影三葉盃盆会  
秋色や弥彦山より日本海  
秋澄めり称名滝の轟々と

木の椅子に寝まる男の秋思かな  
水琴窟秋の調べのまるやかに  
きちきちと転ばぬやうに遊びけり  
石榴割る電磁波てふは見えぬもの  
雨の中飛ぶ鳥もをり蕎麦の花

埼玉 鈴木 愛子

角欠けしお百度石や昼の虫  
秋霖やわが来し方の甲乙丙丁戊

東京 谷田貝順子

透きとほる齒刷子に替へ涼新た  
落下せしどんぐり数多まだあをし  
細波のやうな雲より今日の月

糠床の古漬刻む敗戦日  
東 京 飯塚トシ子

みんみんもあぶらも鳴いて森静寂  
白木樅農家の木戸の野菜市  
今日はここまで森の出口の草の花  
手の届く青い縞ある鳥瓜

露草や小鳥の墓に石重ね  
千 葉 中 山 惠子

新涼の夜風まとひて露天風呂  
学食の売切れ御免初さんま  
星月夜丘に小さき家並ぶ  
虫の音に猛りし日々の鎖もれり

仲直り初松茸の椀澄みし  
東 京 武 田 未 有

秋ともし眼鏡重ねてルビを読む  
牛濡らし馬濡らしゆく牧の霧  
惜別の両手の握手良夜かな  
実りても風船かづら揺るる質

甥と言ふ電話怪しき秋の暮  
東 京 柳 田 秀 子

車窓より顔出す小犬秋の空  
相応の加齢も愉し小鳥来る  
在りし日の姉の面影芙蓉咲く  
今年また一人加はり敬老日